ユートピア

一ばんうれしいこと

河井祥子

幼稚園の片すみでおきた、小さな小さなできごとを、ご報告いたしましょう。

そこには、大きな大きな愛情が、つまっています。

もうそろそろ冬仕度をはじめるころの十一月十七日、ボクは生まれました。

おかあさんは、ボクたちが生まれても寒くないようにと、アゴの毛をぬいて、待っていてくれました。人間は、その中にワラを敷いてくれました。もういつ生まれても大丈夫。

おひる過ぎ、真暗な小屋の中で、十一匹のうさぎが生まれました。どんなうさぎですかって？　もちろん、おとうさんとおかあさんに似た、真白なうさぎです。

お隣りにいるおとうさんうさぎも、とても喜びました。時々、ボクたちにお話をしてくれます。また、遊んでくれる時だってあるのです。

けれど、もっともっと好きなのはおかあさん。いつもボクたちを守ってくれます。お乳も飲ませてくれます。寒くないようにと気をつけてもくれます。わかるでしょう。なにしろ十一匹の兄弟ですから。それでもボクは、おかあさんがイヤな顔をしたのを見たことがありません。

ボクが生まれて一ヵ月たちました。始めは何の子どもだか良く分からなかったようなボクたちも、今では一人前、耳だってこんなに長くなりました。うさぎとびだってできますよ。

ある日、外からこんな声が聞こえてきました。

「あら、一日一日大きくなるワ」

「そろそろお嫁入りさせなくてわネ」
なんてかなしいことでしょう。
すると、おかあさんうさぎは、困ったような顔をしてこんなことを言いました。
「まだまだそんな時期ではありませんの。これから、どんな物が食べられないか、また、お行儀良く食べることも教えてあげなくてはなりません。それに、兄弟仲良く遊べるようにならなくてはネ」
そうなんです。まだまだボクたちは、いろいろなことを、たくさん見たり、聞いたりしなくてはならないんです。
ボクがここから見ていると、人間も、たくさんのことを、おかあさんから教えてもらっています。時々あまり良く教えてもらわなかった人もいるようですけれど。
こんなこともありました。
ボクは、小さい小屋から、広いところへ連れていかれました。ボクたちも、あまり広いところでビックリしましたが、人間の子どもたちもビックリしたようです。きっとボクたちがあまりに小さかったからでしょう。そんな時でも、ボクたちの気持が分かってくれる子どももありますし、全然、そんなことを考えないで、自分だけさわりたがる子どももいます。こういうことも、きっとおかあさんから教えていただくことの一つでしょう。
ボクのおかあさんも、ボクが一人でどこかへもらわれていってもいいように、皆、教えてくれるのです。その時がきたら、この狭い小屋の中にいては知ることのできない世界へと、出ていくことになるでしょう。
ボクたち兄弟、それぞれ違う所、違う世界の中で生きていくでしょう。
ボクの名前？
ピョン太、ピョン吉、シロ助、ミミ夫……まだ決まっていないんです。誰かがつけてくれるでしょう。
決まっていることは、ただ一つ、ボクは、うさぎ、人間にはなれません。そして、人間はうさぎにはなれないということ。
もうすぐ、うさぎも一人前になるでしょう。そして、新しいうさぎが、また、おかあさんから愛を受けるべく、集まって来たではありませんか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）